

文学博士亀井俊介君の「近代文学におけるホイットマンの運命」 に対する授賞審査要旨

アメリカの詩人 Walt Whitman (1819-92) は、従来の伝統にそむいて大胆に野性を發揮し、政治や道徳に関する思想およびその表現形式において、当時は奇抜としか見えなかつたので、大いに反響を呼びおこした。そして本書は、その反響が最近までのアメリカのほかイギリス、ドイツ、フランスおよび一九二八年頃までの日本において、いかなる毀譽褒貶の声となつたかを詳述して、ホイットマン理解の正確をはかり、また評価の公平を期した綿密な実証的研究である。そしておよそ著作そのものに対する内部からの検討をしている者が、外部からの研究である比較文学的検討を「あわせて行なう時、内部だけからの研究がおちいりがちな誤解や偏見を避け、さらに対象の幅広い、より深い理解にいたりうる」ものと著者の言うことは、本書によって例証されている。

本書は序論において、ホイットマンを偶像化することの誤を正して、人間としてまた著作家としての真相を示している。著者はまず彼が予言者をもつて自任するようになったことを指摘し、つぎに彼の民主主義とその矛盾とを語り、彼の自己肯定と自己宣揚との裏に自己疑惑があり、従つて思想上の混乱があつたことを述べ、また後年にはアメリカ中心主義から脱出して、世界市民にならうとした彼の国際主義に注意し、最後に彼の奔放で破格な自由詩形の異質を説明し、のちには洗練こそ最大なものであると彼が言明したことに触れている。

本論第一部において著者は、ホイットマンが母国および西欧諸国において受けた批評について精細に記述してい

る。アメリカでは、詩集「草の葉」初版（一八五五年）に粗野なところもあるが原始的で動物的な力があることを認めたのは好意を寄せた人々の観察であり、同時に多くの方面からは性の問題に関する非難がおこり、その非難は容易に断えなかった。それに反して一八八三年には彼の詩集を「デモクラシーの聖書」と絶讃する彼の版權管理人も現われた。また彼の表現法の影響を受けた詩人が多くなった。本書の著者はなお英、独、仏三か国における反響を調査し、おびただし資料に目を通してゐる。

第二部「日本におけるホイットマン」は著者が主力を傾けた部分である。西洋諸国には自我、自由、平等、デモクラシーなどについて、すでに一応の通念があったので、初めからホイットマンに対する賛否両論があった。ことに詩形については定型詩が伝統となつて普及していたので、彼の放胆さには反撥の聲が高かった。それとはちがひ、明治二十年代の日本では、西洋文学の伝統は少数学者の間に漠然と感じられた程度に過ぎなかつたので、自らの力でホイットマンの詩がどのように異色であるかを見わけけることは覚束なかつた。しかし一八九二年から二、三の紹介者が出始めた。そして夏目漱石がその年「文壇における平等主義の代表者ウォルト・ホイットマンについて」を書いた動機を「厭世主義からの脱出の努力、老子的退歩主義に代る積極的な価値を求める気持など」と、本書の著者は推測している。つぎの紹介者は金子馬治と国木田独歩であるが、注目すべきは高山樗牛が時代に対する不満を赤裸々に吐露する詩をホイットマンに学べと言つた点にあると、著者は考へる。

第二章、明治浪漫主義の時代になつてから、当時の文学界が狭くかつ浅かつたことに対する警告としてラフカードイオ・ハーンは東大の講義でホイットマンの長短両面、ことに短所を指摘した。また内村鑑三がホイットマンに讃辞

を惜しまなかった点を、著者は「理想化したホイットマン像を一種圧倒的な力で提示した」ものと見ている。野口米次郎は正しいホイットマン評価を日本の文壇に導入しようとした者と考えられている。

第三章は、自然主義が口語自由詩の流行を促がしたこと、また岩野泡鳴が性欲の肯定を、そして白樺派が自己主張を、このアメリカ人の詩集に見出したことを述べている。第四章には、大正時代に象徴主義を乗り越えて自然主義や耽美的頹唐にふける人々の「近代詩」が盛んに書かれ、また大正デモクラシーと口語詩とがホイットマンと結びついたものとなり、そして彼の詩集の全訳も計画され、日本におけるホイットマン全盛期が来たとなし、その頂点に立つ者として有島武郎のために五十数ページをさいて、彼の徹底的なホイットマン熱を論じ、有島は晩年懊悩に堪えず、創作の筆がはかどらなくなつてから、ホイットマン詩集の訳業に専心したと見ている。

最後の一章「日本におけるホイットマンの運命」において、著者は有島以後数年間の事情を記し、そしてそれまでの「日本のホイットマン派は、ホイットマンの現実の諸問題との格闘を正しく理解するまでにはいたらず、彼の自己宣揚あるいはデモクラシー宣揚をひどく単純化して受けとってしまった」と嘆いている。

十五年の長きにわたる歴大な資料の蒐集、精密な調査、用意周到な執筆の成果である本書は、まさしく学界に対する見事な貢献である。